

# 世界最高峰、アメリカ補綴専門医への道とその現実

白 賢 Hyun Baek  
 ニューヨーク大学歯学部補綴科大学院



今回は、アメリカで専門医になるためにかかる年数とその費用、年収などについて述べてみたい。

## 歯科専門医になるためにかかる年数

日本では歯学部を修業年限の6年で卒業すれば歯科医師のライセンス(Doctor of Dental Science; DDS)が得られる。博士号(PhD)に4年、専門医資格(Certificated)取得に3年かかったとしても、早い者なら30歳前後ですべてを取得することが可能である。

一方、アメリカでは大学を卒業し、それから歯科医師になるための大学院に改めて進学することになり、さらにその後、専門医養成課程を終えなければならない。修業年限は専門分野によって異なり、矯正、補綴、歯周病は3年、歯内療法や小児歯科は2年、口腔外科は4年+医師免許取得プログラムで2年という具合だ。もちろん博士号の取得には、さらに最低4年の年月が必要となる。

アメリカでは歯科医師ライセンス(DDS)と歯科専門医の資格(Certificated)を有する者はかなりいるが、卒業そのまま専門医養成課程へ進学するのは狭き門で、いったん1~5年程度の臨床経験を積んでから専門医養成課程を受験する者が多い。さらに母国で歯学部を卒業し、アメリカに渡り歯学部に入學し直して卒業後、レジデントになる

人もいるので、正確な数字は不明だが、レジデント修了時の年齢は30歳代の中頃になる者もかなりいるようだ。

また、アメリカでは歯科医師のライセンス(DDS)と博士号(PhD)の両方の学位を取得している者は少数である。これは臨床への道と研究への道が明確に区別されているからであり、補綴など専門医の資格(Certificated)と博士号(PhD)の両方となると、保持者はさらに少なくなる。大学(Bachelor degree)を卒業するのに4年、歯科医師ライセンス(DDS)に4年、補綴科専門医資格(Certificated)に3年、博士号(PhD)の4年を合計すると16年、すべてを取得し終える時には18歳で高校を卒業したとして最短で34歳、途中臨床経験を積んでからだと40歳前後になる計算だ。

## 専門医プログラムにかかる費用

給与が支給される医科のレジデントとは違い、歯科専門医養成のためのレジデンスプログラムはTuition(授業料)が必要となる場合がほとんどだ。このことから、プログラムの成り立ちが医科とはそもそも違うということが理解していただけたと思う。

プログラムの授業料は何を基準に決めているのかは不明だが、それぞれ何らかの意図があり、適正価格の基準を決めていると思う。個人的にはプログラムの人気度やプログラム自体の経営

体力に左右される気がしている。

大学のプログラムは大学によってかなりその額に開きがあるが、具体的な授業料が知りたければ、各大学歯学部歯科レジデンスプログラムのホームページをみてみるとよい。この20年間で、物価の上昇と歯学部人気の上昇に伴い、1.5倍くらいにはなっているようだ。有名どころをあげると、ボストン大学:約7万ドル、ハーバード大学:約6万ドル、ペンシルバニア大学:約6.5万ドルとなっており、大体5万ドル前後が相場だ。大学ではなく、公立病院などが主催するプログラムではたいてい給与が支給される。たとえば西海岸の名門校UCLAも有給採用なので、人気が非常に高いうえにin stateの学生2名しか採用しないようだ。2年前に創設されたニューヨーク大学ストゥーニーブルック校も有給らしく、何とも羨ましいかぎりだが、そうしたプログラムはアメリカの歯学部を卒業していることが前提であり、さらに母校の出身者から採用されることが多いのが特徴で、外国人歯科医師にはほぼノーチャンスだと思っている。

また、ArmyやNavy附属の歯科病院にある補綴専門医養成プログラムに採用されるという選択肢もある。彼らは卒業後数年間、兵役として各附属歯科病院で勤務しなければならないが、授業料や生活費のすべてが支給されるので、アメリカ国籍をもつ者にとっては

図1 一般歯科医師の平均実年収 (American Dental Association, Health Policy Institute, Surveys of Dental Practice, 2013より)

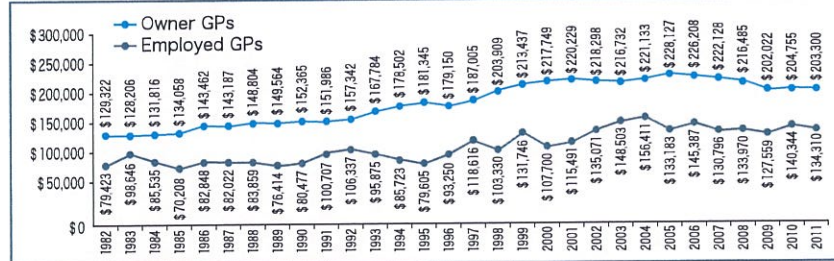
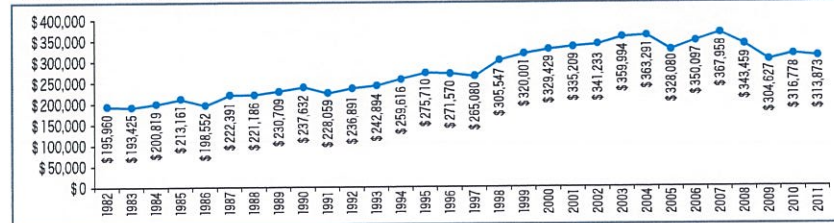


図2 歯科の専門医の平均実年収 (American Dental Association, Health Policy Institute, Surveys of Dental Practice, 2013より)



魅力的な選択肢の一つになっているようである。

ただし、こうしたケースは少数で、多くの学生が銀行からローンを借り入れ、平均20万~30万ドルという家を買えるくらい多額の借金を背負うことになる。American dental education associationが2013年に実施した調査によると、歯学部生は平均24.1万ドルのローンを抱えており、この数字は過去10年間で66%も増加したと報告している。ADAの調査によると、ローンの平均利率は6.8%、最高は9.5%に達する。一般的には40万ドルのローンを組むと25年間、毎月2,800ドルずつ返済することになる。具体的例をあげると、私の補綴科レジデントの友人の一人は、歯学部、専門医養成課程でかかるすべての授業料、生活費を銀行から借りており、ローンの総額は60万ドルを超える。その利率は8%と恐ろしいほど高い設定となっており、毎月5千ドルの返済が20年以上ものしかかってくる。専門医になるまでの期間も考慮すると、単純に収入がいいとは言いがたい気がするが、良い悪いの判断はここでは触れないでおく。

「アメリカの学生は勉強に真剣だ」とよく言われるが、多額のローンを学生自身が負担し、卒業後はその返済をしなければならぬことが、その理由やモチベーションの一つになっていることは間違いないだろう。なぜ彼らはそこまで人生をかけ、母国を捨て、時には家族や妻子を連れてまで、アメリカにやってくるのだろうか。それは母国の政治情勢、経済状況が要因にあると考えられる。実際ニューヨーク大学の補綴科にいるレジデントの出身国をみても、シリア、レバノン、イラン、イラクなど政治的に難しい状況にある国から来ている者が多い。

「歯科」の分野に限って言えば、インドや韓国、台湾、中国、香港などアジア出身の学生の方が群を抜いて多い。インドと韓国の出身者だけで歯学部生全体の30%を占める年もあるようだ。特に韓国は1990年の経済危機を契機として、年少時にアメリカに渡り、そのままこちらに移住しているケースが多数を占める。アメリカで歯科医や専門医になるということは、多額の借金をしてでもなお、彼らのなかでは「アメリカンドリーム」にほかな

らないのだろう。そんな彼らからすれば、日本の歯科医師の置かれた状況は何とも恵まれたものだといえないだろうか。国立大学歯学部の授業料が年間50万円前後であることを彼らは知る由もない。日本の社会保険制度が100%素晴らしいものとは言い切れる自信はないが、治安も良く極めて平和な日本で、もし歯科大学の入試が英語で行われ、外国人にも門戸を解放したら、世界中から志願者が殺到してもおかしくはない。

## 専門医の収入

一般歯科医の平均収入は20万ドル前後、専門医の平均収入はその2倍と言われているが、実際はそれほどではないようだ(図1,2)。というよりも、ピンキリというのは日米で違いはなく、これも完全に個人の資質やライフスタイルに合わせて大きく異なるという言い方が正しい。逆にライフスタイルによって年収や勤務時間、さらには治療方針といった仕事内容までも自分で決められることが、歯科医師という職業のなかでも特に専門医、フリーランスとしてのメリットである。

この平均所得の高さゆえか、アメリカにおける歯科医師の社会的地位、歯科医療の存在感は非常に高く、人々から尊敬される職業の一つである。では日本の歯科医師は社会的地位が低く、尊敬される職業ではないのか? コンビニの数より多いと揶揄されてしまうような職業なのか? いや、日本でも尊敬されている歯科医師は数多くいるはずだ。むしろ、外国人の誰に聞いても低価格な医療費で成り立っているほうが不思議に思われる。日本の社会保険制度は、勤勉な日本人以外では成り立ち得ない社会保険のシステムであると断言してよい。